

2026年3月1日 礼拝説教要旨

ヨハネによる福音書講解説教73「闇に勝つ愛」

イザヤ29：15～16、ヨハネ13：21～30

裏切りという行為は、人間関係の中でも最も嫌悪されるものだと思います。しかしわたしたちの人間関係には常にこの裏切りがつきまといます。だいたいわたしたちの関係は、騙された、裏切られたで終わるのです。そして裏切られた心の傷はなかなか癒えるものではありません。今日の御言葉の最後に「夜であった」（30節）という印象的な言葉があります。この裏切りにこそ、そこに人間を支配する深い闇の現実が示されています。

イエスさまはご自分が信頼していた、愛しておられた弟子から裏切られました。どうしてこのような裏切りをイエスさまは止められなかったのかという疑念を抱く人もおります。神の子なら、そういう裏切りを見抜き、未然に防ぐこともできたのではないか。しかしイエスさまはユダの裏切りを黙認しておられる。それどころか、「しようとしていることを、今すぐ、しなさい」（27節）とまで言われる。まるで裏切りを容認するように、ユダのするまま、思うままなのです。ここで心に留めたいことは人間の自由意志です。神さまはわたしたち人間を意のままに動くロボットではなく、自分で考え、主体的に行動することができる存在としてお造りになりました。それが神さまのかたちとして造られた人間の特性です。

それは神さまが何より人間を信頼しておられることのしるしです。しかしその信頼を人間は自ら裏切りました。アダムとエバが神さまとの約束を破って木の実を食べたのは人間の自由意志です。でもそこでも人は思う。神さまならなぜ最初から罪を犯さないように人間をお造りになられなかったのか。そのように造った神さまが悪いのではないか。そうではない。神さまはそういう人間を望んでおられるではありません。自由な意志を持って、強いられてではなく、自ら進んで神さまを愛し、神さまに従う人間です。けれどもそれができなかつた。蛇の誘惑に負けて、アダムは自ら神さまの信頼を裏切るのです。それが罪です。ユダの裏切りもまたこの人間の罪の表れに他なりません。イエスさまは、ここで自ら進んで神さまの信頼を裏切った人類の罪をすべて引き受けておられます。弟子たちの足を洗われたように、その罪の汚れを黙って引き受けておられるのです。イエスさまがユダの思うままに任せているのはそういう理由です。そのようにしてイエスさまはわたしたちの裏切られる悲しみ、痛みを経験されます。人に裏切られて人間不信に陥るわたしたちの痛み、悲しみをイエスさまは誰よりも近くで感じておられます。

イエスさまは単刀直入「あなたがたのうちの一人がわたしを裏切ろうとしている」（21節）と言われます。けれども弟子たちは誰のことを言っておられるのか分からない。それでお互い顔を見合わせるのです。ここから言えることは、ユダは弟子たちの中で目立って悪い人間ではなかったということです。いつもイエスさまに反抗して、弟子の中でも問題児のような人なら、「あいつかもしれない」となったかもしれません。でも誰も分からないし気づかない。今日のところではイエスさまがほとんど答えを言っているようなところもあります。「イエスは、『わたしがパン切れを浸して与えるのがその人だ』と答えられた。それから、パン切れを浸して取り、イスカリオテのシモンの子ユダにお与えになった」（26節）それでも弟子たちは分からなかった。中には施しに行ったと思っている者もいたと言います。とぼけているのでしょうか。人が良すぎるにもほどがある。

ユダだと分からなかったのではなく、ユダだと認めたくなかったのではないのでしょうか。イエスさまから「この中に裏切り者がいる」と言われて、お互い顔を見合わせるのです。だれが裏切り者でもおかしくない。皆、内心何かやましさを感じていたのかもしれない。どこかでイエスさまを裏切ったような経験があった。イエスさまは自分のあのことを言われているのかもしれない。それぞれ思い当たる節があったのかもしれない。「正常時バイアス」という言葉があります。特に災害時などに心の平静を保とうとして「まだ大丈夫」と根拠なく思い込む心理が働くと言います。そのようにして自分に都合の悪いことを無視したり、問題から目をそらすのです。ユダだと認めないのも、自分たちの中から裏切り者を出したくない。そんな不名誉なことがあってはならないという思いなのかもしれない。そのようにして自分たちを正当化する。

この新しい月を新たな戦争が始まった暗いニュースから始めるのは何とも気の重いことです。朝のドラマの主題歌で「日に日に世界が悪くなる。気のせいかな。そうじゃない」と歌っています。本当に日に日に世界が悪くなっていく。闇の支配が強くなっています。でも一方でわたしたちはそれを「気のせい」だと思いたいのです。何かの間違いではないか。弟子たちもユダだと分からないのではなく、ユダだと認めたくない。気のせいと思いたい。それが人間の闇を深めています。「光が世に来たのに、人々はその行いが悪いので、光よりも闇の方を好んだ。それが、もう裁きになっている」(ヨハネ3：19～20)

けれども、その闇をすべてイエスさまは引き受けてくださいました。今日のところで繰り返されている言葉があります。それは「パン切れ」(プソミオン)という言葉です。この言葉はこのユダの裏切りのところで4回だけ使われているめずらしい言葉です。「浸す」というのは、ユダヤ人の食事の慣習で、パンのかけらを一つの鉢にあるジャムのようなものにつけて食べることのように。興味深いのは、この一つの鉢に浸してパンを渡すという行為は、友情、愛の行為と言われています。主人が家族や仲間と食事をするときに、愛の証、友情の証としてパンを浸して配ったのです。イエスさまはご自分を裏切るユダに浸したパン切れを渡します。「あなたがしようとしていることをしなさい。それでもあなたはわたしの友だ。それでもあなたを愛している」裏切りという最も闇の深まる場所にイエスさまの愛が光を放ちます。その闇の中でこそ、わたしたちはイエスさまの愛を知ることができる。神さまの愛が人間の罪の闇に勝っているのです。やがてその愛は十字架の上で完全な勝利をもたらします。

今日はこれから聖餐に与ります。パンを受け取るときに、どうかイエスさまの愛を感じてください。愛がこの罪の闇を打ち砕くこと。裏切られても、それで終わりではない。そこからまた関係を立て直していく。よみがえりの命がそれを可能にするでしょう。

天の父よ。あなたからの信頼を裏切り、それゆえに人からの信頼も裏切るようなわたしたちです。その罪を背負ってイエスさまは十字架で死んでくださいました。それでもわたしたちを愛し、赦してください。その愛に応える者とさせてください。また戦争が起きました。憐れみを切に願い求めます。平和を与えてください。これ以上、犠牲がありませんように。主の御名によって祈ります。アーメン。